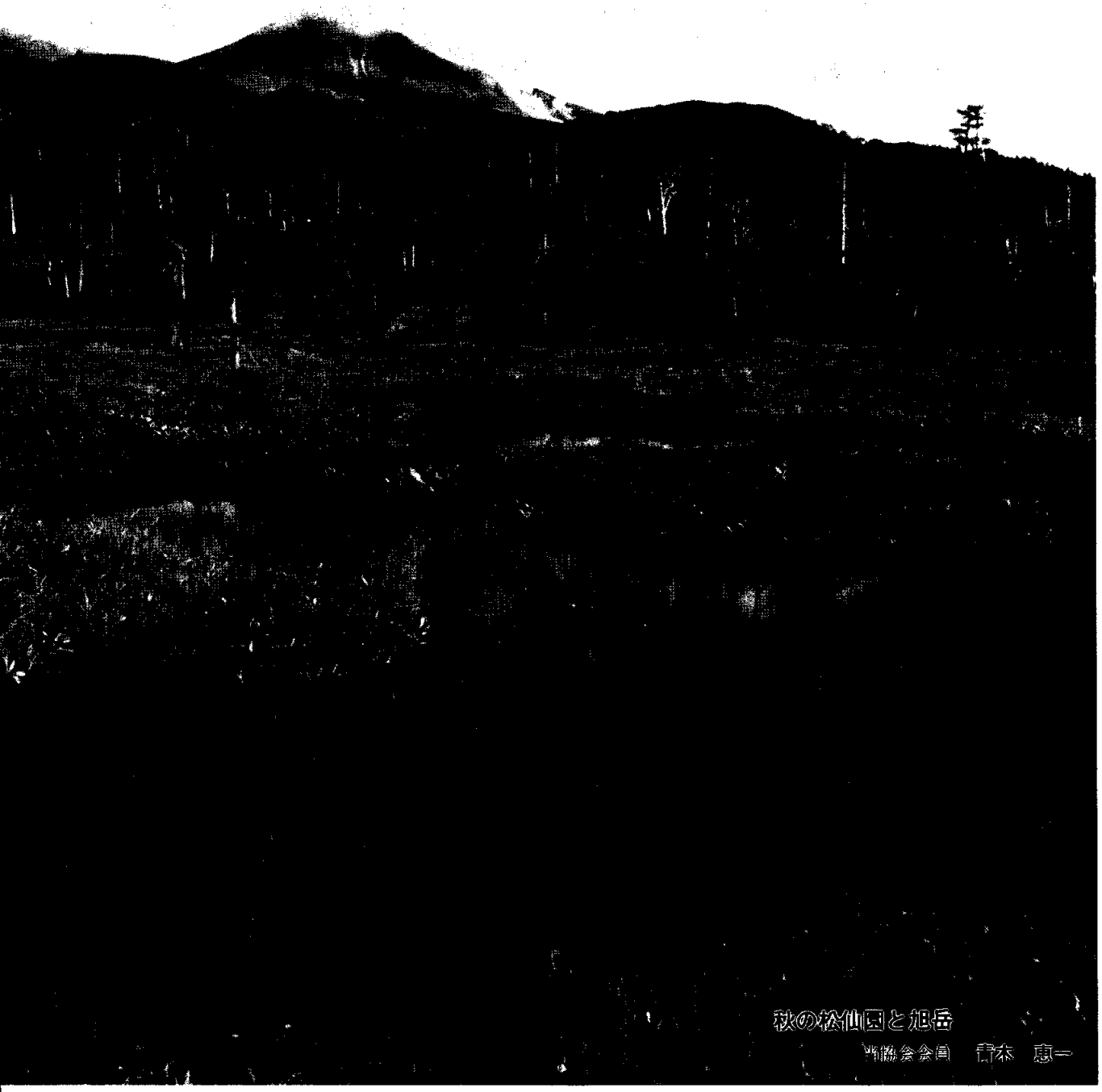
NC 自然・環境・人

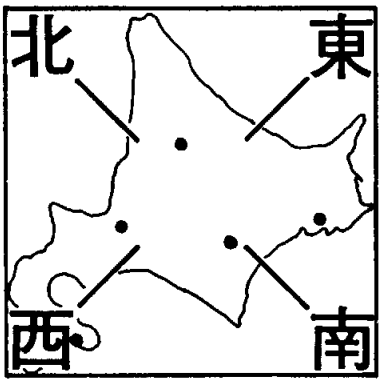
No.52

北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1985年9月号



秋の松仙園と旭岳
当協会会員　青木　恵一



人間も、鳥も

児玉　健次

私は高校生のときにテニスをはじめ、今でも朝早く、中島公園のテニス・コートに出かけることが多い。

朝の五時、六時、みどりの木立ちにかこまれたテニス・コートはなかなかに魅力的である。

ゲームに熱中している私たちの頭の上をヒヨドリがけたたましく鳴いて飛んでいく。私の場合、頭の上に気をとられると次の球をミスをして、パートナーに「すまない」と声をかけることになっている。

コートに姿をあらわすのはスズメ、ムクドリ、ハクセキレイ、今年の春はカルガモが低くコートの上を横切った。

札幌のような都会で、何種類かの野鳥を気軽に見られることを大切にしたいと思う。

私は、参議院議員の小笠原貞子さんなどとウトナイ湖、釧路湿原に何回か調査に出かけた。その都度、自然保護団体の皆さんに大変お世話になった。昨年、私が北海道自然保護協会に入会させていただいたのも各地の自然保護団体の皆さんとのふれあいが契機であった。

千歳川放水路の問題で私たちが北海道開発局と交渉したとき、ある幹部が、洪水の危険性について力説し「人間と鳥のどちらを選ぶか、というときには鳥に遠慮してもらわなければなりません」と発言したことがあった。

鳥に「遠慮」してもらうようなことを無理にすすめていたら、やがてすぐ、人間の健康な生活を守る自然環境も失なわれていくことははっきりしている。その幹部はあわてて発言を取り消したが、はしなくも本音が出たものだと私は感じた。

一九八一年八月の石狩川大水害の後、私たちは被災地をまわり、研究者、専門家の協力もえて共産党の石狩川治水対策を発表した。堤防のカサ上げによらず、遊水池・地の設置、日本海に注ぐ河口部での放水路設置などがその骨子である。

千歳川放水路計画が石狩川下流部の水害防止には役立たないこと、この計画で広大な農地が削りとられ、気象の変化によって農業に重大な影響が及ぶことなどが、運動の前進によって徐々にではあるが多くの道民の共通認識になりつつある。

鳥にとってよくないことは、人間にとってもよくない。「人間か、鳥か」でなく、「人間も、鳥も」を大切にしよう。

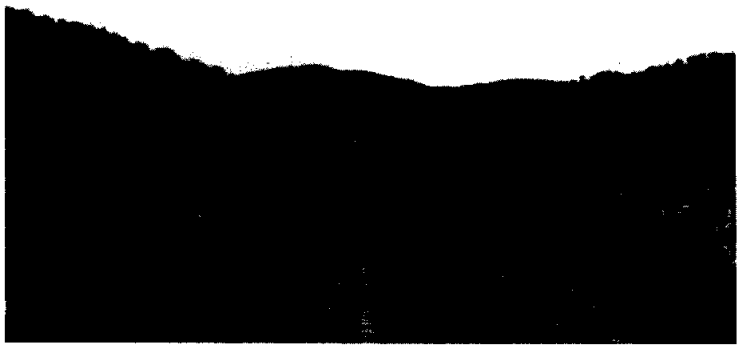
（日本共産党北海道委員会・札幌市在住）

幌延問題と非民主主義

神沼公三郎

幌延問題は当初、電力業界の低レベル核廃棄物貯蔵施設をめぐる問題だった。八二年二月に道新が報道して一般に知られるに至ったのだが、実はその前年から誘致運動を進めていたと佐野幌延町長（当時）は明らかにしている。そして八四年の四月、低レベル施設を含む核燃料サイクル施設の下北半島集中立地が方針決定された直後、突然に動燃事業団の高レベル施設に変身した。低レベルから高レベル施設へ、電力業界から動燃事業団への急転に誰もが驚ろき、とまどった。だがその後の推移のなかで、隠された経過が明らかになっている。

動燃事業団の植松理事と渡辺核燃料部長は次のように述べている。すなわち、動燃事業団は当初から高レベル施設を主眼にしていたのだが、故・中川一郎科技庁長官がまず低レベルで地元を納得させ、それから高レベル施設を持ち込む考えだったため、やむなくそれに従った。しかしすでに七九年から極秘に国内二五ヵ所で地質調査を進めており、道内は幌延、奥尻など数ヵ所である、と。また成松幌延町長も八四年六月二九日の町議会で、「低レベルから高レベルに変わったのではない。最初から両方一緒に出発していたのだが、たまたま八二年に低レベルの方だけ新聞に報道されたので、その点の説明に力を注いできた」と答弁している。



〈幌延町開進地区〉

低レベルと高レベルの話がともに最初からあったのに、関係者はあえて前者しか幌延町民に知らせなかったのである。しかも低レベルの方も、新聞が取り上げなければ町民への連絡はもっと遅れていただろう。かくも重大な問題なのに、部分的な情報公開にとどまったのは町民を騙したに等しい。あとになって一連の経過を納得せよといわれても出来るものではない。幌延問題にはこのように、今日の原子力行政に特有の非公開的、非民主主義的体質が集中的にあらわれており、地方自治における民主主義のあり方も厳しく問われている。叙上の経過を有することだけからも、幌延問題には直ちに終止符がうたれるべきである。そして、大規模プロジェクトの安易な誘致などではなく、あくまで基幹産業を育成する姿勢のなかから、地域の真の発展が模索されなければならない。

（北大天塩演習林・幌延町在住）

北海道自然保護協会の活動方針をめぐって!!

当協会の自然保護運動が何を対象に、どのように行われるべきかはきわめて重要な問題である。これについて協会の意思統一をはかるべく在札幌の理事の話し合いが一九八五年八月七日夜、協会事務局で八木、小関、俵、長谷川、成瀬、鹿士、紺谷、福地、狩野、滝口の十氏が参加して行われた。要旨は次の通り。

保護運動の対象については一人から「二次的自然」をふくまない「原生的自然」の保護に限定すべきだとの意見があった。これに対して一人は「環境破壊により人類の生存が危機に立っている現在、協会の活動も環境保全全般に広げることが有意義である」との意見があった。また別の一人は「原生自然そのものが存在しない。環境保全の基本理念の普及に役立つものはとりあげるべきだ」との発言があった。しかし大勢の意見は、いわばこの中間であり、環境全体のうちでも生産活動そのものはふくまず「自然環境」と言うべき部分を対象とすべきだということであった。

次に自然環境の改変を運動の対象にするにしても、どの程度の規模のものを対象とすべきかについて現在問題になっている千歳川放水路、札幌の手稲山スキー場建設問題を題材として話し合われた。

千歳川放水路については一人から「協会としてはとりあげるべきではない」との意見が出されたが他の二、三人は「大規模な自然改造には当協会として調査し、反対すべきものであれば反対すべきである」「大規模な開発は不必要な時代になっている。千歳川放水路を作っても洪水がなくなるとはかぎらない」等の発言があり、千歳川のような自然環境の大規模な改変については協会としてできるかぎり関与していく方針が確認された。

一方、手稲山スキー場建設問題については一人から「局地的問題であり協会として反対すべきではないと思う」、他の一人から「道内各地域でスキー場が作られているのに手稲についてだけ反対するのはおかしい」との発言があった。これに対して一人は「森林が山地にしか残されなくなった現在、大都市内のスキー場開発は道内の代表例としても反対すべきである」との意見をのべた。しかし手稲山スキー場建設に協会として反対すべきだとの合意には達しなかった。

（紺谷）

MY BOOK 私の本棚

石城謙吉著「たぬきの冬」

発行／朝日新聞社刊
頒価／一、二〇〇円

今村　成和
（元北海道大学学長）

これは、動物学者で、北大の苫小牧演習林長の石城さんの随筆集である。

十四編の随筆が収められているが、それぞれに巧な題がつけられているので、それを先ず紹介しよう。キツネの七変化、キツツキと木つつき、タヌキの冬、カインの末裔、種の輪郭、ヒグマ数理学、エゾリスとチョウセンゴヨウ、鳥の中のサル、モズと先生、心のカワウソ、アオサギの挽歌、イタチ風雲録、スズメのお宿、私のクロツグミ、以上である。少しこりすぎていて、これだけでは中味を想像できないものもあるが、それは読んでのお楽しみとしておこう。その中味がまた素晴しい。

この表題からも判るように、とり上げられているのは、比較的私達の身近にいる鳥やけものたちである。その生態を、しっかりした学者の目でとらえ、私達が知らずに見過してしまっている、彼および彼女たちの行動のもつ意味を、流麗な筆致で次々と説き明かし、私達を、いつしか自然の摂理の中に捲き込んでゆく。有名な中谷宇吉郎博士の雪の随筆がそうであるように、すぐれた科学随筆の魅力は、手頃な材料を美事に料理して、私達の知的好奇心を満足させてくれることにあるのだが、それは、謎解きにも似た手法であるといってよいだろう。それに加えて、この書物の読後感がきわめてさわやかなのは、石城さんの動物に寄せる愛情が、この謎解きの原点であるからで、私達は、安心して、そして少なからぬ共感を覚えながら、石城さんの世界に引き入れられてゆくのである。

石城さんは、このあとで「イワナの謎を追う」（岩波新書、一九八四年）という本も出された。これも、動物学には全くの素人が読んでも実に面白い書物で、自然を愛する人達には、是非一読を勧めたい。

ESSAY
くらしと風景

文・高橋揆一郎

いま私の住む郊外風の新開地は二十年前にも一度住んだところで、当時の田園調の野趣が忘れ難く、その後の開発の進度を軽く見て、再び住みついたのである。いまさらあわててもはじまらないが、住宅地としての拓け方は予想をはるかに越えた。四年前の当初はヒバリの囀りに小躍りした。〝声は聞こえて見えないヒバリ〟と子供時分に歌った唱歌の、そのヒバリをたっぷり眺めたのだからいうことなしであった。五月末にカッコウの初鳴きをたしかめるのも欠かせない句読点の意味をもった。それどころか朝の犬の散歩に出た家の者は頭上の電柱に飛来したカッコウの、尾羽を強くはねあげながら鳴く姿まで現認したのである。セグロセキレイもかわるがわる挨拶にきた。わが家の庭の貧弱な植栽を仲間うちの話題にするかのようにだ。

二年たつとヒバリの姿は稀になり、カッコウの声は間断ない住宅新築の工事音や行き交うトラックのひびきや物売りのスピーカーにかき消されて聞き逃すようになった。四年めのことしはヒバリに会うこともなく、カッコウとセグロセキレイには選ばれた偶然にありつくしかなくなった。こうした贅沢が拒否されるのも利便効率主義との取引きの結果である。

向こうの国道の手前に六車線の道路が延びはじめて、先日は中学校の角の木立ちが消えた。緑の丘陵を崩した単純でだだっぴろい火山灰地の風景にちょっとしたアクセントを斎していたのだった。続いて校門前の通学路とこっちを遮っていたこぢんまりとした林が一夜にして失せ、のっぺらぼうの崖肌が現れた。切り倒さ

絵：高橋揆一郎

れた緑は日に日に茶褐色に変わっていった。
近辺の住人たちは、中学生の非行の巣がなくなってよかったといっている。ベトナム戦争での米軍の枯葉作戦を思い出す味気なさだ。
いつぞや東京のある住宅地に公営アパートを建てる話が出て住民たちが反対運動を起こした。理由は景観の妨害になるからだという。またある住宅地では老人のための施設の建設も反対された。似たような理由からだが、景色や雰囲気と、家のない人びとの救済とがどう捉えられているかで私も胸を痛めたものだ。前者を地域エゴだと一蹴できないものもあるし、かといって……。近くは小樽もその苦渋を味わった。こんなことをいい出すときりがない。
景色は自然のままの方が美しいにきまっているが、それを自分の懐に小宇宙としてとり込みたいという欲求もまた根深い。盆栽、盆景から庭園まで日本人の風雅好みにはとくべつのものがあるけれど、針金でがんじがらめにねじまげられた盆栽の松もあれば、盗掘の高山植物に飾られた庭もある。
すぐれた美術品などは本来多くの人の目にふれさせた方がいいだろうに、所持者の独占欲がそれを許さないということもある。美術品に限らず美人も同じようなものだと私は思うけれど、人間はともかくとして自然はものをいわない。
ものいわぬものに愛やあわれを感じるのが人間の本性だと思うがそれが必らずしもそうでなく、ものいわぬものを征服する快感もまた人間の業。
ところで私の生まれた故郷は農協もない炭礦ひとすじのまちだった。そこには父母の墓がある。墓参にゆくとふるさとの荒廃がさびしい。
兎は追わなかったけれども少年時代のふるさとの〝かの山〟は露頭炭採掘のために、空を背景に異様な鋸状の山になった。代わりに洗炭水で黒光りしていた〝かの川〟は小ブナが釣れるまでに澄んだ。これをあれこれいうことはできない。ふるさとの人たちも食わねばならないからだが、私はふるさとについてはものいわぬ人間になるしかない。
ひょんなきっかけから北海道自然保護協会の八木健三先生に面識をいただき、一文を書くように促され、新刊の共同執筆のメンバーの中の辻井達一先生、若浜五郎先生、俵浩三先生にはとうにお見知りをいただき、酒の席でもごいっしょしたことがあるが、こうした碩学にして実践的な方々の『北海道・自然と人』を読ませていただいた。損得を離れたあまりにも大きな仕事を見せつけられ、この問題に寄せる私のちまちまと繊弱な郷愁やセンチメントが恥ずかしくなった。
思わずペンの走りも鈍るというものだが、ちまちま男にもそれなりの心配がとりついて離れない。前述の六車線の道路から少し手前の橋の袂に立っている三本のトド松のことだ。
方角によっては二本にも見えるその松は界隈にとって得難い点景なのだが、いまその根元近くまで整地が迫ってきた。
関の五本松ではないが、一本切られて夫婦松になるか、三本ともやられて新しい空間を作るのか。どちらにしろまさに累卵の危機にある。
切るか切らないかは私の知らないどこかのだれかの胸三寸にある。私には手も足も出ない。
これを書き終えて玄関先に出てみた。まだ立っている。とにかくいままだ立って生きている。

自然豆事典

〔塩生植物〕

植物にとって塩分は普通、大敵だ。雑草防除にも用いられるし、北ヨーロッパなどで塩を道路の凍結防止に使っているところでは道路周辺の植物、並木や花壇などへの影響が問題になる。これらの国では車粉公害対策でスパイクタイヤが禁止・制限されているがその反面ではこうした問題があるのだ。アメリカでは更に、これに対して道路法面用に塩分に強い草種が開発されつつある。こうなると正にイタチごっこのありさまだ。
塩を好む植物はないが、塩に強い植物はある。それが塩生植物で、多くはもちろん海岸に生えるが、内陸でも塩分の多いところには見られることになる。日本では内陸の塩湖が塩湿地、あるいは塩砂漠といったものはないから、塩湿地といえば海岸の湿地ということになるが、アジアでも、南北アメリカでも、オーストラリア、アフリカとほとんどの大陸では広大な内陸の塩湿地に塩生植物がみられる。
塩生植物の代表格は日本ではアッケシソウとよばれるアカザ科の植物だ。その名のように北海道の厚岸で発見されて和名が与えられた。しかし厚岸に限るわけではない。その形からサンゴソウ、ヤチサンゴなどともよばれる。高さ15～30cmくらいで多肉質の茎からなるが、いってみれば細いソーセージを連ねたような形をしている。春から夏にかけては緑色だが、秋になると紅葉して美しい紅赤色に色づく。そこでサンゴソウの名がある。
紅葉のメカニズムは木の葉のそれと同じで同化作用でできた糖分が蓄積して赤色の色素アントシアンに変ることになるが、先にいったソーセージ型のつなぎ目、つまり茎のくびれが余計、糖の流れを悪くするために全草、美しく紅葉することになる。
塩に強いのは植物体内の浸透圧が高くて海水に浸っても体内の水を引き出されないためで、別に塩分を好むわけではない。
北海道では本家の厚岸では今はむしろ少ない。能取湖の群落が一番大きく、有名になっている。泥質の海岸で波が強く当らないところによく生育する。一年草で種子は波に運ばれるから群落の位置は時に移動する。
紅葉といえば普通、樹の葉のことだが、これは草の紅葉、しかも平面の紅葉だ。海の色に映えて中々に美しく、ちょっと変った感じの秋の景色である。

（辻井　達一）

湿原にとりくみ 独創の画風を創造

佐々木栄松（画　家）

インタヴュアー：八木　健三
（自然保護協会々長）

一九一三年北見市置戸に生れ、幼少期を白糠に送り、後釧路に移る。独学で油絵を学び、釧路湿原の自然を描きつづけて五〇年。画壇には属せず孤高の志をもって独創的な画風を追求する。

Q□さきごろの「北の自然を描写展」には国立公園の大作を多数ご出品下さった上、チャリティ展には色紙を何枚もお出しいただき、まことにありがとうございました。お陰さまでたいへん盛況でした。また平行して行われた「歩々の会画展」にも、温い感想文を寄せていただき、一同感激しました。

佐々木■なかなかいい企画でしたね。私は、「絵を描くのは生きていることのあかしをたてることだ。命をかけた仕事をするのがプロだ」と考えていますが、そんな考えからすると、「むしろアマの方に精神的なプロが多い」と思いますよ。

Q□この前横路知事との鼎談（一九八三年一二月）で釧路湿原についてのお話を伺いましたが、そもそもの結びつきは？

佐々木■幼いころは白糠町の庶路にいましたが、庶路川とコイトイ川の間、昔は湿原で、もっと昔はデルタ地帯で、それがいまは市街になり、そこで魚を追いまわし、木の実を喰べたりよく遊んだものです。父が釣った大きなアメマスを見て、釣に興味をもち出したのもこの頃です。学校から帰るとカバンを放り出して、湿原の中を遊びまわった、腕白小僧でしたネ。

Q□その中に湿原に魅せられて、湿原の画家になられたわけですね。画家になられた動機は？

佐々木■絵は子供のときから好きだったんです。よく近所の人達にたのまれて虎や竜、松に梅…といった絵を描いてあげると、五銭、一〇銭というお小使をくれる。それでアメと釣バリを買うのがうれしくてネ…。小学校三年のとき義兄の友人である釧路の藤田印刷所（石版）で育てられるようになったが、藤田ご夫妻は商業画家にしてリトグラフをやらせようと考えていたらしい。しかし仕事をやってゆくうちに、商業デザインではなく芸術としての油絵の方に進む決心をしました。親切なご夫妻には申し訳ないと思いながら…。

美術学校には入れてもらえなかったので、全くの独学です。「自然が一番の先生」と思って勉強したし、その思いは今も同じです。戦後主として湿原をモチーフにしているのもいわば、子供のこのから心の片隅で、なんとなくくすぶっていたその思いが、湿原への〝愛情〟となって噴射したのだと思います。

Q□佐々木さんの絵は独得なタッチで、あるときは華麗に、あるときは沈潜して、つねに見る人の心を湿原に引き入れてゆく何ものかがありますね…。この画風はどうして創られましたか。

佐々木■日本の油絵は黒田清輝らの渡欧画家に始まった。かつての北海道開拓使、後の総理大臣黒田清隆の甥だった黒田は、フランス留学で法律を勉強する筈だったのに、ラファエル・コランの弟子になってアカデミズム派の絵を学ぶようになり、それと印象派の影響をつよくうけて帰国した。そして美術学校を創立したため、これらの影響から西洋志向一辺倒の傾向がつよかった。これは岡倉天心なども批判しています。この傾向はその後継者たる藤島武二らによってさらに増幅された。これ以来日本の画壇では、西欧画家の画風にならわないと評価されないという情けないことになった。これを「美術のものまね文化」と言っているのは、心ある画家や評論家（マスコミ）も同じ筈です。

私の絵は誰れの真似もしていない、全く私の独創的なものです。日本人は「日本人の油絵」を描くべきです。最近私の友人がニューヨークで日本の女性画家Mさんの個展を見たが、それが私の絵によく似ているという。そして米国の批評家連が「これこそ日本人の油絵だ」と賞めているというのです。面白いナ…と思いました。その友人は、私にもニューヨークあたりで個展を開いたら、といってくれるのですが、これはなかなかたいへんです。

Q□佐々木さんの絵には、湿原の花神（フローラ）がよくでてきますね。

佐々木■一九四五年たまたま、釧路の大空襲に出会い、高地からその実態をこの目でみた。根室方面からの艦載機グラマンの編隊の波状攻撃をうけ、このとき、わたしの一人子、四歳の娘が犠牲になった。フローラは、その娘と幻の魚の白いイトウを〝モチーフの二重表現〟で鎮魂のためです。

実はこの釧路大空襲を三〇〇号の大作にまとめたいという構想を、三〇年間もあたゝめているのです。構図はほぼできていますが、完成にはまだ数年はかかるでしょう。

Q□佐々木さんはイトウ釣りの名人で、ご著書もあるほどですが、最近はやっておられますか。

佐々木■以前は大部やったのですが、最近のブームともいえるイトウ釣りの状態には異論がありますね。もう一〇年ほどあまりやっていません。私の釣りは制作の一つの重要な段階で、魚は釣れなくていいんです。

Q□画業を通して得られた自然観をおきかせ下さいませんか。

佐々木■自然は言葉はもたないが、感性をもっている。自然に遊び、自然に触れて感性を磨くことがもっとも大切ではないでしょうか。これによって人間性が育ってゆく。ドラクロアが「自然は大きな辞典で、われわれはこれから学ぶことが大きい」といっていますよね。

とに角自然は最大の先生だと思います。北海道の画家が中央志向ではなく、自分の独創的な手法で、このすばらしい北海道の自然を描いていただきたいですね。

わたしは札幌に、いつ訪れても（四季それぞれ）道庁の赤レンガと庭の池など、実に素晴しいモチーフだと思うんですが、他国ものわたしには、その心にふれる度合が少いので描けない。やはりこれは札幌の画家の仕事だと思います。しかしわたしの感じた範囲では残念ながら、あれを描いた傑作にはまだお目にかかっていません。是非共その傑作の出現するのを待っています。

Q□長時間有益なお話どうもありがとうございました。

〈あとがき〉「どうも肩がこるので…」と奥様考案のチャンチャンコを羽織っておられるのに、話が絵に及ぶと実に情熱的な話ぶり、私の一年先輩とは思えぬお若さでした。お庭に這ったチシマザクラの七〇年の古木が印象的でした。

協会の活動

○昭和六十年三月十三日（水）
五十九年度第十回常務理事会
主な議題
一、「守ろう緑・北海道」キャンペーンの件
二、監査報告の件
○四月六日（土）
六十年度第一回常務理事会
主な議題
一、五十九年度事業報告・決算報告の件
二、六十年度事業計画・予算計画の件
○四月二十四日（水）
第二回常務理事会
主な議題
一、手稲山西野スキー場計画の件
二、会誌の取扱いの件
三、会費規程の件
四、新教育計画に対する意向調査の件
五、六十年度事業計画の件
○五月十日（金）
・第三回常務理事会
主な議題
一、六十年度基準単価等の件
二、会員特典の件
三、六十年度通常総会の件
四、役員変更の件
・新教育計画に対する意見を道教育長あて提出
○五月十一日（土）～十二日（日）
全国野鳥保護のつどい
主催　第三十九回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」北海道実行委員会
会場　札幌市民会館・野幌森林公園
出席　八木会長
○五月十八日（土）
・講演会
会場　札幌市教育文化会館
講師　竹田津　実氏
参加者　四十八名
・第九十五回理事会
会場　札幌市教育文化会館
主な議題
一、五十九年度事業報告及び決算報告の件
二、六十年度事業計画及び予算計画の件
三、役員変更の件
四、会員の入退会の件
・六十年度通常総会
会場　札幌市教育文化会館
主な議題
一、五十九年度事業報告及び決算報告の件
二、六十年度事業計画及び予算計画の件
三、役員変更の件
○五月十九日（日）
自然観察会
場所　野幌森林公園
講師　俵　浩三氏　狩野　広氏
参加者　六十名
○六月五日（水）
第四回常務理事会
主な議題
一、講演会の開催の件
二、機構の再検討の件
三、財政方針の件
四、開発計画に対する基本方針の件
五、道自然保護団体連合との対応のあり方の件
○六月九日（日）
自然観察会（全国一斉ブナ林観察会）
主催　当協会、財・日本自然保護協会、南北海道自然保護協会、道自然観察指導員連絡協議会
場所　黒松内町歌才
講師　宗像英雄氏
参加者　百四名
○六月十六日（日）
自然観察会
主催　当協会、道野鳥愛護会、道自然観察指導員連絡協議会
場所　苫小牧市ウトナイ湖
講師　三木　昇氏、柳沢信雄氏
参加者　六十名
○六月二十八日（金）
自然を守る論文コンテスト入選発表
主催　当協会、朝日新聞社
入選　（一般の部）入選：坂本芳明さん
佳作：萱野　茂さん、種市佐改さん、伊藤隆一さん、（小学生の部）入選：大友直子さん、佳作：菊地祐江さん、千葉達裕さん、中村絵里菜さん（中学生の部）入選：木村好江さん、佳作：佐藤千春さん、佐藤　公さん、福司亜弥さん＝入選作は会誌に掲載予定＝
○七月五日（金）
七月四日付道新掲載のエゾシマフクロウの記事に対して、エゾシマフクロウの保護増殖上配慮されたい旨、道新あて要望書を提出
○七月六日（土）
第九十六回理事会
会場　道婦人文化会館
主な議題
一、定款・諸規程の改正の件
二、財政基盤の件
三、活動方針の件
四、新入会員承認の件
○七月十三日（土）
講演会＝ゼニガタアザラシとの共存をめざして＝
主催　当協会、道新、ゼニガタアザラシ研究グループ、哺乳類研究グループ海獣談話会
会場　札幌・道新特別会議室
講師　新妻昭夫氏、羽山伸一氏
参加者　六十五名
○七月二十日（土）
自然を守る論文コンテスト表彰式
会場　札幌・朝日新聞社
○七月二十八日（日）
自然観察会
場所　藻岩山
講師　八木健三氏、福地郁子氏、俵　浩三氏
参加者　二十名
○八月五日（月）
全国野鳥保護のつどい実行委員会
会場　札幌・道庁赤れんが庁舎
出席　八木会長
○八月七日（水）
懇談会＝当協会における自然保護運動の基本理念とフレーム作りについて＝
参加者　在札理事十名
○八月八日（木）
新計画（道総合計画）基本構想案説明会
会場　札幌・道庁赤れんが庁舎
出席　八木会長
○八月十六日（金）～十八日（日）
自然観察指導員講習会
主催　当協会、財・日本自然保護協会
会場　札幌市定山渓豊羽
講師　金田　平氏、柴田敏隆氏、工藤父母道氏、斉藤新一郎氏、小川　巌氏、八木健三氏
参加者　六十九名
○八月十七日（土）～十八日（日）
全道自然観察指導員大会・豊羽の自然に親しむ市民の集い
主催　道自然観察指導員連絡協議会、当協会、札幌市
会場　札幌市定山渓豊羽
参加者　六十名
○八月二十日（火）
オスジカの捕獲禁止に対する意見を道知事あて提出
○八月二十二日（木）
新計画基本構想案に対する意見を道知事あて提出
○八月二十三日（金）
オスジカの捕獲禁止に関する公聴会
主催　北海道
会場　札幌・道庁赤れんが庁舎
出席　八木会長
公述人として、捕獲禁止に賛成である旨、発言

行事のご案内

【並木散歩】

―札幌中心部の秋の並木道を歩こう―

日時　十月六日(日)　九時～十二時頃
集合　北大植物園入口前
講師　村野紀雄
参加費　無料、ただし、地下鉄代など交通費が五百円程度かかります。
雨天中止

寄贈図書

●『浦幌町郷土博物館報告（第18号～第24号）』（浦幌町郷土博物館）　寄贈・同上
●『きたの鳥たち』（野生生物情報センター）寄贈・同上
●『北海道の開発・85年版』（財・北海道開発協会）寄贈・北海道開発局
●『山階鳥類研究所研究報告・第16巻・第3/3号』（財・山階鳥類研究所）寄贈・同上
●『ウトナイ沼自然環境調査報告書』（財・日本野鳥の会）苫小牧市＝寄贈・八木健三
●『春国岱原生野鳥公園基本計画書』（財・日本野鳥の会）根室市＝寄贈・八木健三
●『北海道東部・アトサヌプリ噴気孔域のミズスギ群落・釧路市立博物館紀要第10輯別刷』（新庄久志）寄贈・同上
●『釧路湿原のハンノキ林・北方林業・Vol. 37. No. 4・別刷』（新庄久志）寄贈・同上
●「釧路市立博物館常設展示におけるいくつかの試み・博物館研究Vol. 20. No. 5. 別刷」（沢四郎、新庄久志）寄贈・同上
●『知床国立公園幌別地区基本構想』（財・日本自然保護協会）斜里町＝寄贈・同上
●『論点・85年第4号』長縄三郎＝寄贈・佐々木栄松
●『伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書（標津町教育委員会）寄贈・同上
●『自然保護のあゆみ』（財・日本自然保護協会）寄贈・同上
●『札幌市の公園・緑地・60年版』（札幌市）寄贈・同上
●『渡島の現況・60年3月』（渡島支庁）寄贈・八木健三
●『おしまの民有林・57年3月』（渡島支庁）寄贈・八木健三
●『ウッドペッカー』（大雪山自然観察講座を記録する会）寄贈・東川町教育委員会
●『北海道土地利用基本計画図』（北海道）寄贈・石川俊夫
●『北海道土地利用基本計画図（見直し区域図）』（北海道）寄贈・石川俊夫
●『環境アセスメント―原則と方法―』（環境情報科学センター）寄贈・石川俊夫
●『峰路』第九号（札幌山岳倶楽部）寄贈・石川俊夫
●『林』1953年5月号～12月号、1954年1～2月号、4～5月号、7～8月号、11月号、1955年1～2月号、1956年4～5月号、1957年1月号、6月号、1958年7～8月号、102. 110. 125. 137. 155. 156. 163. 165. 168. 176. 178. 179. 181. 183. 185～194. 196. 200～205. 213. 219. 225. 227. 229. 232～235. 238. 242. 244. 247.248. 251～256. 258～261. 274. 276～285. 288. 290. 354（北海道造林振興協会）寄贈・石川俊夫

★新刊紹介★

井上元則著「鳥と漢詩」

発行／北方自然保護研究会
頒価／二、三〇〇円

鳥学、森林保護等広い分野に活動されている井上元則先生が最近「鳥と漢詩」を刊行された。これは漢詩に詠われた鳥を解説したものではなく、漢詩そのものが先生の作品であり、私たちはそのすばらしさに賛嘆の声を送ってやまない。本書には野鳥の生態や形態を中心に作詩した八十余種に及ぶ野鳥讃歌の佳吟が、解説・カラー写真と共に収められている。（新妻　博）

八木健三・辻井達一編著「北海道自然と人」

発行／築地書館
頒価／二、四〇〇円

地質、動物、植物、気候の各方面にわたって夫々の専門家が北海道の自然と形勝の特質と重要性を説くと共に、その貴重な北海道の自然がどのように開拓されて行ったか、そしてそれが現在どのようになっているか、将来それはどうあるべきか、ということが大変分り易く平易に夫々一流の専門家或いは著名な執筆者によってしかも興味深く語られていて、北海道に関心を持つ人には必読の好著である。ただ問題は、自然保護や環境の問題で一番読んでもらいたい人たち、つまり北海道の開発に従事している人たちの関心をどうひき起すか、ということになると、また別の観点から新しい編さんが必要になるだろう。何故ならここで述べられている開発への反省は、我が国でも明治の頃からすでに幾人かの先覚者によって繰り返し全く同様なことが述べられているが、開発の当事者はひたすら目前の仕事の処理だけを考え行なっていて、そういう声には耳を貸して来なかったからである。しかし例えば石狩川の洪水対策として遊水地を復活しようというような試みは、ようやく当事者がそのことに気がつき始めたと見るのはひいき目であろうか。しかし環境問題に人々が広く深く目ざめてくることがやはり第一の前提である。本書はその意味で最もよい基本的な手引書であり、案内書である。（井手貴夫）

昭和六十年九月二十五日発行
〇六〇　札幌市中央区北一条西七丁目
広井ビル五階
発行所　社団法人 北海道自然保護協会
電話（〇一一）二六一―六五八六（代）
（〇一一）二九一―五四六五（直）
郵便振替口座小樽　一―四〇五五
北海道拓殖銀行本店　〇一七二五九
北海道銀行本店　一〇一四四四
発行人　八木　健三
印刷　特急印刷株式会社